

第1回東亜総研月例セミナー講演録

日 時：平成25年12月13日（金）13時30分から15時まで

場 所：東京都千代田区麹町4-1-1 麹町ダイヤモンドビル9階 株式会社レコフ会議室

講 師：バーレーン王国特命全権大使 ハリール・ビン・イブラヒーム・ハッサン閣下

テーマ：日本に対する国際社会の期待

<講演録>

司会：ハリール・ビン・イブラヒーム・ハッサン閣下をお招きいたします。どうぞ拍手でお迎えくださいませ。

（会場 拍手）

あらためてご紹介させていただきます。バーレーン王国特命全権大使ハリール・ビン・イブラヒーム・ハッサン閣下、そして令夫人さまです。ようこそお越しくださいました。ありがとうございます。

本日は、東亜総研の第1回月例セミナーにお集まりいただきまして、誠にありがとうございます。進行を務めさせていただきます。東亜総研、常任理事の近藤三津枝でございます。本日はハッサン閣下をお招きいたしましてご講演いただきます。それでは講演に先立ちまして、東亜総研の代表理事、会長の武部勤よりごあいさつさせていただきます。

武部：皆さま、こんにちは。月例セミナー第1回目の幕開けにご出席をいただきましてありがとうございます。当財団は、11月6日に設立記念のフォーラムを開催することができました。まだ産声を上げたばかりの赤ちゃんといっても過言ではありません。そして私共は毎月1回、月例セミナーを企画いたしまして、その第1回目がただ今お迎えしました駐日バーレーン王国特命全権大使のハリール・ビン・イブラヒーム・ハッサン医学博士でございます。今、奥さまもご一緒に入場していただきました。

大使と奥さまは、先般、私共夫婦の立ち会いの下に、明治神宮において挙式を挙げたばかりの新婚さんでございます。大使は紋付羽織袴で、奥さまは白無垢で古式豊かな日本式でした。大使は紛れもないイスラム教徒であるにもかかわらず、国王陛下のお許しをいただいて、明治神宮で式を挙げたわけでございます。私の日本バーレーン友好議員連盟会長時代、2005年にイブラヒーム・ハッサン大使が初の駐日大使として日本においでになりました。奥様と結婚されたという一事を持ってして、どれほど親日的なお方であるかという

ことでございます。

今日は大使が、長年日本で務めてお感じいただいた、日本に対する期待についてお話しさせていただきます。ありがとうございました。

司会：これより、バーレーン王国特命全権大使ハリール・ビン・イブラヒーム・ハッサン閣下より「日本に対する国際社会の期待」と題し、ご講演をいただきます。皆さまのお手元には本日ご講演いただきますレジユメ、そして大使閣下のご略歴をお配りさせていただいております。閣下はご経歴にありますように医学博士として輝かしい学歴をお持ちでいらっしゃると思います。そして2002年にはバーレーン王国の保健大臣を歴任され、2005年より駐日バーレーン王国全権大使としてご活躍でいらっしゃいます。そして素晴らしい受賞歴、多彩なご趣味をお持ちでいらっしゃいます。配布させていただきました紙面にて、大使閣下の詳しいご紹介に代えさせていただきたいと存じます。

また本日のご講演では、バーレーン大使館の方に通訳をしていただきます。それではハリール・ビン・イブラヒーム・ハッサン閣下、よろしくお願い申し上げます。

大使：皆さま、こんにちは。本日はお集まりいただきありがとうございました。また武部先生、本日はこのような機会を与えてくださりましてどうもありがとうございました。私は日本に来て9年目になります。ですから今日のプレゼンテーションでは、私が日本滞在中に考えたことや感じたことを皆さまにお伝えできればと思っております。本日のプレゼンテーションの題は「日本に対する国際社会の期待」ということで、お話を進めていきたいと思えます。

では最初に、本日お話しすることを簡単にご説明したいと思います。まず1点目は、国際情勢の変化とそれに伴う困難。2点目は、日本のリーダーシップに対する世界の期待。3点目にアラブの春やデモの拡大が意味すること。4点目は、中東と日本の戦略的重要性。5点目は、バーレーンは中東の規範となりうるか。そして最後に結論付けたいと思えます。

では早速、プレゼンテーションを始めたいと思えます。17世紀当時は、日本からヨーロッパへ行くのに3カ月かかっていました。それが今では日本からヨーロッパへ行くのにたった12時間しかかかりません。技術の発展により、社会はますます変化してきています。情報は、私たちの指先にあふれているのです。このような技術革新は、私たちの母なる地

球を小さな世界村へと変えました。それに伴い、グローバルガバナンスの在り方も変わってきています。

シンガポールの元外務事務次官・国連大使で現在は大学の教授を務める、キショール・マブバニ先生の最新著書に『偉大なる収束』という本があり、次のように書かれています。第2次世界大戦後、70億人が193カ国に分かれて暮らす秩序が構築された。世界はまるで193隻の別々の船に乗っているようなものだった。そのような世界の中では、船同士の衝突を防ぎ、お互いに協力できるような体制をつくることが必要だった。それが今や、世界はまるで70億人がたった1隻の大きな船に乗っているようなものだ。その大きな船の中で、193の船室に分かれているだけなのだ。そのような今の世界の問題点は、この193の船室の中にそれぞれ船長がいて、同じ船に乗っているにもかかわらず、お互いに自分たちの権利ばかりを主張する。この大きな船1隻全体を大きな視点を持って見る船長が存在しないのだ。たった1隻の船に193人の船長が乗っているところをどうぞご想像ください。大きな惨事を引き起こすことになります。

また、米国の国際政治学者のイアン・ブレマー氏は『「Gゼロ」後の世界—主導国なき時代の勝者はだれか』という著書を記しています。以前は世界の中にG7、G8、G20といったグループがあり、世界をリードしていました。しかし、それが今後Gゼロという状態になると予想しています。Gゼロの意味ですが、この世界の中でグローバルなリーダーシップを率先して取る国、あるいは同盟が全くないという状況です。私はこのような世界の中では、連携力と調和性のある世界的視野を持ったリーダーが必要だと考えています。そしてまた、法律的なグローバルガバナンスも今後ますます必要になってくると考えます。そのような現在、ここで日本の役割が求められると思います。日本は世界を率いるために、いわゆる普通の国になる必要があります。世界は日本の知恵とリーダーシップを必要としているのです。

さてこのスライドにある旗の写真には、第2次世界大戦後に日本とアメリカがうまく協力したように、日本は中国ともうまく協力していくことができるのではないかという思いを込めました。また先ほどのキショール・マブバニ教授の『偉大なる収束』という本の引用に戻りたいと思いますが、教授はその本の中で、思いもよらないことを考える時代が来たと述べています。アメリカが世界情勢を握った時代はもう終わりつつある。そして、今こそアジアが世界経済の中心的役割をするときである。アジアの台頭は今後間違いない。

世界の首脳たちは今こそグローバルな変化に備えるときが来たのだ。今見てきたようにマブバニ教授の本の中では、今グローバルシフトが起こっていると書かれています。

ここでもう1冊、パリ政治学院教授クロード・メイヤー氏の本『金融危機後のアジアリーダーになるのは、中国か日本か』をご覧ください。この著書のタイトルにあるように今、次のような問い掛けがなされています。アジアを引っ張るのは中国なのか、それとも日本なのか。今後、日本は世界を引っ張っていく資質を持っているのでしょうか。私は間違いなく、日本は次世代に世界を引っ張るような資質を持っていると思います。日本人には素晴らしい英知、そして素晴らしい文化があるのです。ですから、日本は国連安全保障理事会常任理事国入りも視野に入れるべきだと私は考えています。

そのような世界をけん引するリーダーになるには、防衛力も必要になってくると思いますが、日本の防衛政策には今後どのような変化が必要なのでしょうか。Gゼロの世界では、各国はそれぞれ自分の国の中の問題に対処するのに忙しく、誰も他の国を守ろうとはしません。そのような時代の中で防衛政策を考えていくとき、私たちが心に留めておかなければならない3つの言葉があります。まず1つ目はデイビッド・マック氏の言葉で「外交が有効な手段であることは歴史を見れば分かる。しかし、クローゼットの中にこん棒を隠しておくことも役に立つ」です。そして2つ目の言葉は、孫子の兵法から引用した「武力が最も際立つのは、それを使わずに目標を達成したときである」です。日本はこれに関してはすでに知恵を持っていると思います。そして3つ目は、アルベルト・シュナイベル氏の言葉で「平和と政治的安定こそが世界市場で経済競争を勝ち抜く基盤となる」です。

戦争は世界経済を破壊します。20世紀は戦争の世紀であったといわれていますが、私たちはもうこのような戦争をしてはならないのです。戦争といえば、ナショナリズムこそが戦争の元凶となります。私たちのものの見方を広めていかなければならないのです。そしてナショナリズムからグローバルリズムへとシフトし、そのグローバリゼーションを成功に導くためには、協調性のある文化とそれを理解するリーダーたちの存在が必要になります。

さて、ここで私が久能山東照宮を訪れたときのお話をさせてください。久能山東照宮は、徳川家康公をまつた神社です。久能山東照宮を訪れて学んだことは2つあります。1つ目としては、徳川家康のような包括的な視野を持つリーダーは、より良い世界、そして国

を造ることができるということ。そして2つ目は、八百万（やおろず）の神に代表される多神教の考え方の素晴らしさです。八百万の神に代表される多神教の考え方は、日本人の中にある大切なものの見方を反映しています。それは、多くの可能性があるだけで絶対なる真実はないという考え方です。これは非常に大切なことだと私は思っています。このものの見方は、ハーモニーとチームワークをつくります。なぜなら絶対なる真実が1つもないのであれば、お互いがお互いの意見に対して寛容になれるからです。これは違いを認め、受容し、さらに協調性を持ってお互いに交渉を続け、より良い考え方や視野の形成が必要ということの意味しています。

世界が小さな村へと変容した今のこの状況で、グローバルで困難な問題に取り組むには、この日本的な八百万の神に代表されるような多様なものの見方を受け付ける考え方が必要です。世界的に困難な問題に取り組むためには、グローバルなもの見方と視野の広い考え方を備えたリーダーたちが必要なのです。日本人の八百万の神に代表されるような精神性や文化は、この混沌（こんとん）とした国際社会で大きな役割を果たすのに資すると強く考えています。

また、伊勢神宮に訪れたときも多くのことを学びました。伊勢神宮に込められた精神性に深く感銘を受けました。まず、伊勢神宮の建築技法についてです。幾人もの素晴らしい技術を持つ宮大工によって建築された伊勢神宮は、完璧さを追求する現在の日本の製造業の源流に当たるのではないかと思います。また、伊勢神宮が20年ごとに式年遷宮を行うことに関しても非常に感動いたしました。20年ごとに式年遷宮を繰り返すことによって、技術の継承が可能になると思います。このようなことを見ても、日本こそが世界の製造業をリードできる存在だと私は確信しています。

さて、世界の製造業をリードする日本ですが、世界経済においてもリーダーシップを取れるのでしょうか。人々に優しいグローバリゼーション、そして、人々に優しい資本主義を達成することができるのでしょうか。2008年のリーマンショックは、アメリカ経済のみならず世界経済に大きな影響を与えました。最近ではアラブの春、そして世界各国で民衆によるデモが起きていますが、これらは関連があると考えられるのでしょうか。ここでまた1つ著作を紹介したいと思います。ノーベル経済学賞受賞者のジョセフ・スティグリッツ教授の本です。題名は『The Price of Inequality 不平等の代償』で、副題は「今日の不平等な社会構造がいかに関われわれの未来を危険にさらすか」です。その本の中でスティグ

リッツ教授は次のように述べています。

過去にも世界中の人々が同時に、「今の社会は何かおかしい」「変わっていくべきだ」と声を大にして立ち上がる時代が何度かあった。歴史的に長い目で見れば、2011年もまさにそのようなときであった。チュニジアで始まったデモは、スペイン、ギリシャ、イギリス、そしてアメリカと世界中に広がっていった。このようなことが起きたのは、各国の政治経済システムが本来すべきことと実際の社会状態のギャップがどんどん拡大し、無視できなくなるほどに広がってしまったからだ。政府は経済問題に対処していない。国の中の公平さが、一部の特権階級のために犠牲になっている。それに伴い、人々は不公平感を感じ、それは裏切られたという感情に発展する。中東では民主的手続きに訴える機会がなかったのだといわれているが、民主主義が発展しているアメリカや西洋諸国でさえもデモが拡大した。スティグリッツ博士は経済学の教授であると同時に、クリントン政権で経済アドバイザーでもあった人です。彼の結論はこのようになります。自由市場は規制緩和をしていくだけでは不十分なのだ。

では、この問題になっている規制緩和、そして小さな政府の考え方がいったいどこから来たのかを振り返ってみましょう。規制緩和、小さな政府をどんどん推し進めていくという流れは、1979年から1990年に政権に就いたサッチャー首相、そして1981年から1989年に政権に就いたレーガン大統領、この2人にまでさかのぼることができるのです。レーガン大統領は就任当時、「政府は問題を解決しないばかりか、政府の存在自体が問題なのだ」と述べました。このように、政府のトップによる政府自身を否定するような発言があったことに私はすごく驚きました。これは悪い政府が問題だということを言いたいのかもかもしれません。もしそうであれば、それを直せばいいと思います。そして、鉄の女と呼ばれたマーガレット・サッチャー首相は、規制緩和と小さな政府を推し進めました。彼女は就任中に、国の機関の民営化をどんどん進めました。その結果、英国ではさまざまな物価が上がってしまいました。このような規制緩和と小さな政府の考え方はどんどん推し進められましたが、2008年に世界的経済危機が起こることによってその時代は終えんを迎えました。

そしてここで問題になってくるのは、規制と規制緩和のバランスをどのように取ればいいのかということです。このバランスをうまく取ることで、グローバリゼーションと自由市場経済を生き残っていくことができると考えます。どのように資本主義とグローバリゼーションを続けることができるのか、そのバランスも考える必要があると思います。そのような中で、日本は人々に優しい資本主義のモデルになれるのでしょうか。私はこの問い

に対して、日本こそが人々に優しい資本主義のモデルになれると考えています。なぜなら、日本の資本主義は社会的責任を伴っているからです。雇用の創出、教育制度、福祉事業、年金制度、失業保険。こういったものと資本主義を非常にうまくバランスを取って進めていると思います。

ではここから、そのことを証明するいくつかのデータを見ていきたいと思います。この表でご覧になられている通り、日本は今、人口動態に関して非常な困難に直面しています。しかし私は、日本がこの困難を乗り越えることができると信じています。そして、日本の1人当たりのGDP（Gross Domestic Product）は世界でも最も高い部類に入っています。貧富の格差を測る指標となるジニ係数も日本は非常にいい数字が出ています。日本の社会は平等だということを示しています。また、富の人口中間値でも世界でトップクラスに入っています。経済競争力に関してもトップクラスです。

これから医療費のお話をしたいと思います。私は以前医師をしておりましたので、こちらを詳しく見ていければと思います。日本の1人当たりの医療費は3,000ドル前後です。それに対して、アメリカは1人当たり8,000ドル近くを使っています。2年前ぐらいにニューズウィーク誌で、日本の医療システム全体の素晴らしさが世界で1番だという記事を見つけました。その記事の中では、アメリカの医療システムの順位は世界で37位だったと思います。また、医療費の対GDP比率を見ても、日本が9.5%であるのに対して、アメリカは18%とおよそ日本の2倍の医療費を支出しています。

さらに肥満率を見てみると、アメリカでは国民の約30%が肥満だといわれています。それに対して日本人の肥満率はたったの4%です。これは今、肥満だけのことを言っていますが、ここにやや太り気味も含めると、アメリカではなんと国民の70%がやや太り気味、もしくは肥満ということになるのです。これは非常に深刻な数字です。なぜなら肥満がまん延すればまん延するほど、より多くの人たちが糖尿病、高血圧、そして心臓発作という病気を患うからです。その結果、国として医療費がかさみ、ついには爆発してしまうほどの医療費になってしまうのです。ですから中には、2050年にはアメリカの医療費の対GDP比率が45%にまで上ってしまうという予想をしている人もいます。

さらに、妊産婦の死亡率を見てみましょう。アメリカの妊産婦の死亡率は、日本に比べてなんと8倍にまで上っています。また、死亡率全体を見ても日本のほうが低くなっています。そしてこれらを全部含めて全体的に見る幸福度という指標があるのですが、それでも日本は非常に高い部類に入っています。

今まで、日本の資本主義は社会的責任を伴っているということをお話ししてきましたが、次に、日本人は歴史・宗教・文化からいったい何を学んできたのかということについて考えてみます。

まず、『古事記』と『日本書紀』です。この精神の下、日本人は団結をしました。そして、この神道こそが日本の魂の原点です。また、神仏融合の習慣は日本人の非常にバランスの取れた性格を形作ってきました。本音と建前の文化は、チームワークを行うときに非常に大切になってくると私は思っています。このような日本独特の精神性は、日本を西洋化することなしに、日本独自の特質を守ったまま近代化することを可能にしました。さらにこのような日本の心は、働くときに必要になる労働倫理も形作りました。今日本にとって問題になってくるのは、このようなグローバリゼーションの時代に、グローバリゼーションと日本独自の文化を共存させることができるのかということです。

今度は、日本の歴史について見てみましょう。戦国時代から、徳川家によって日本は天下統一されました。その際、日本が非常に賢いなど思ったのは、教育に非常に力を入れたということです。17世紀には識字率はほぼ100%でした。そして、19世紀の産業革命を経て日本は近代化されました。先ほど説明させていただいた日本人の英知と現実主義こそが、第2次世界大戦の敗戦からの復興、そして国際社会への早期復帰を可能にしたのです。このような日本人の精神性そして知性は、過去の敵対勢力とも協調性を持って行動できるようにしていると私は思います。これは例えば、第2次世界大戦後に日本がアメリカを非常に良いパートナーにしたということでも読み取れると思います。

さて今後問題になってくるのは、日本の外交官は世界的紛争を良い機会に変えることができるのかということです。日本は中東の平和に協力してくれるのでしょうか。中東の平和と安定は日本経済にとっても生命線です。皆さんがご存じの通り、中東はエネルギーにとって非常に重要な場所です。また、中東の歴史は非常に豊かです。イスラム帝国はその勢いが最大に増していたときに、スペインのほうにまでその勢力を伸ばしました。その当時、今のスペインの一部はアンダルシアと呼ばれていました。このアンダルシアについて、イスラエルのジャーナリストであるウリ・アブネリ氏は「アンダルシアが発展していた当時、キリスト教、ユダヤ教、そしてイスラム教の学者がギリシャ哲学書や科学書を共同翻訳した時代があった。この時代こそまさしく黄金時代であった」と述べています。

しかし、問題は1917年から始まりました。この年、当時のイギリスのバルフォア外相がユダヤ人国家の建設の支持を表明したのです。その後1937年の国連決議で、パレスチナの地はユダヤ人地区とアラブ人地区に分割されました。そして1948年、正式にイスラエルが建国されたのです。それ以来、戦争は絶え間ないです。そしてこれらの戦争全てが日本経済に悪影響を与えています。ですから、日本にとっても中東の平和は生命線となるのです。中東の繁栄も日本にとって重要です。なぜなら、そのことによってエネルギーの価格が抑えられますし、中東が安定することで日本はそこをマーケットとして見ることができます。

さてここで、バーレーンは中東の規範になりうるかということを考えてみましょう。バーレーンもまるで日本のような島国です。しかし、私たちの国は非常に小さいです。しかし戦略的に非常に重要な位置にあります。アメリカの第5艦隊がバーレーンに駐留をしています。これは中東からのエネルギー供給を守るためです。またバーレーンは多文化社会でもあります。先ほども申し上げましたが、アメリカの第5艦隊がバーレーンに駐留してそこを守っているおかげで、1日に1,600万バレルの石油が世界に供給されています。

またバーレーンは、かつてエデンの園があった場所ともいわれています。そして5,000年前、バーレーンはディルムン文明の中心地でもありました。当時、バーレーンは交易の中心地でした。その際、このディルムンシールというものが、その貿易の品々の製造者、原産地を証明するために品々の袋に貼られていました。このシールをよくご覧になっていただければ分かると思うのですが、日が昇っていく絵が描かれています。バーレーンも日出ずる国と呼ばれていたのです。

そしてその後、さまざまな文明がバーレーンに影響を与えました。ディルムンの後、ペルシャ文明がバーレーンに影響を与えました。さらにギリシャ文明もバーレーンに影響を与えたのです。これはバーレーンにあるイスラムのモスクですが、712年に建設されたもので今もバーレーンに現存しています。さらにイスラム帝国の影響も受けました。ポルトガル、イギリスの統治も経験をしました。このような歴史を経て、今バーレーンは非常に多様化した経済を持っています。

さまざまな産業が栄えています。さらには中東の観光やスポーツの中心地でもあります。また、バーレーンは宝石の中心地でもあるのです。バーレーンは非常に天然真珠が有名で、かつての貿易は天然真珠に非常に頼っているところがありました。さらにバーレーンの女性は非常に行動的です。

では、結論にまいりたいと思います。ノーベル経済学賞受賞者でありハーバード大学の教授でもいらっしゃる、アマルティア・セン教授の言葉を紹介したいと思います。世界中から集約された見識や発明を共に分かち合い、発展させることにより文明は栄える。私たちは、このようなことを通じて発展することができるのです。また私たちは、進化の法則も心に留めておかなければなりません。生き残った者たちは最もたくましい者でもなく、最も賢い者でもない。最も適応能力が高かった者が生き残ったのです。

そして最後のスライドで、ビスマルクに関する言葉も紹介したいと思います。ビスマルクは皆さんご存じの通り、プロイセンを統一し、近代ドイツの礎を築いた方です。しかし、その後ドイツに不道德の種を植えたのも、ビスマルクでした。そして、その結果、第1次世界大戦、第2次世界大戦でドイツは非常な大惨事を経験することになります。そのようなビスマルクですが、ここで紹介するのはそのビスマルクの友人であったアルブレヒト・フォン・ローン伯爵の言葉です。彼はビスマルクの友人であり行動を共にしていましたが、次のような結論を持ちました。政治や外交において、何か不道德なことをすれば、その報いは必ず自分に返ってくるのだ。例えば自分たちのことだけを考えたり、目先の利益だけを考えて行動したりすれば、その報いは遅かれ早かれ必ず自分に返ってくる。私たちはこのことを覚えておかなければならないのではないのでしょうか。ありがとうございます。

司会：ハリール・ビン・イブラヒーム・ハッサン閣下、ご講演ありがとうございました。非常に分かりやすい PowerPoint と、大変有意義なお話を頂戴いたしました。これからの日本への期待、そして貴国バーレーンとの友好を一層深めていただくためにはどうしたらよいか、お話をいただきました。せっかくの機会でございますので、ここで皆さま方からご質問を受けさせていただきたいと思います。

会場 1：大使閣下のお話を通して、私たち日本人が自分のことを本当にグローバルな観点からよく見ていなかったということをあらためて感じさせていただきました。大使は、日本の歴史、文化というものを本当に深くご理解の上、そのエッセンスが 21 世紀にどう生かされるべきなのか。日本人のためだけでなく、世界のためにそれは有用で世界は大きな変化の中にあるだけに、そうした日本の持っている可能性をもう一度再認識するようというご指摘は、本当に啓発されるものがあり感銘を受けております。

1 つだけ質問いたします。聞くところによりますと「世界の新しい思想というのは、世界の文明の交差点に生まれてくる」ということを高名な歴史学者が言っていますが、今お話にありましたようにバーレーンというお国も実は多くの文明が交差する地点に立っておられる。そこからどういう新しい時代をつくっていく思想が生まれてくるのか。そのような可能性がもしかしたらあるのかもしれない、というふうにも感じました。アーノルド・J・トインビーの言葉であります、そういった言葉を連想するようなバーレーンの歴史、文化における世界的な意味というものが何かおありなのではないかと。お感じのことがもしあれば、お話しいただければと思います。ありがとうございました。

大使：ご質問ありがとうございました。バーレーンは非常に小さな国ではあるのですが、非常に秩序立っておりまして、インフラもしっかりしております。それで皆さまご存じのように、今中東ではさまざまな問題が生じております。

中東ではそのガバナンスの方法をどんどん変えていかなければなりません。ブッシュ前大統領は、イラクを通じて中東に民主主義を輸出しようとしてしました。しかし、その試みは大失敗に終わっています。民主主義は、どこか他から持ってくるか輸出をするとか、そういう類いのものではないのです。それぞれの国が自分の国に根差した文化に基づいて、自分たち自身の民主主義を、自分たちの手で育てていく必要があるのです。民主主義は建築物のような、更地にしていきなり外からどんと建てるという類いのものではなくて、時間をかけて教育をして、少しずつ育てていくものなのです。バーレーンは識字率 100%ですし、非常に小さな国なので統制も利きやすく、秩序立っています。ですからこのバーレーンが中東スタイルの民主主義を発展させていけば、他の周りの中東の国々に恐れられたり拒否されたりすることなく、受け入れられていくのではないのでしょうか。

今バーレーンでも、国王が、2001年に父親の跡を継いで国王に即位した後、どんどんバーレーンの民主化を進めております。この民主化を通じて、われわれは中東における立憲君主制の良いモデルとなれるように、力を尽くしているところでございます。ここで日本の力をぜひともお借りしたいのです。日本のお力を借りて、バーレーンの民主化を進める。そして、その民主化が中東の他の国に波及すれば地域は安定し、そのことによって石油をはじめとするエネルギーの価格も安定し、また日本にとっても良い市場となることができると思います。ですから、中東の安定は日本にとっても非常に重要だと思うのです。ご質問いただき、ありがとうございました。

会場 2：今日は世界的な広い視野の中でのお話をいただきまして、ありがとうございます。お話の中で最後に少し触れておりましたが、今後、日本とバーレーンの中で、特に手を携えながら注力していくことは何とお考えなのか、お聞かせいただければと思います。

大使：協力できることは本当に数多くあります。生活のほとんど全ての面で協力が進んでいると思います。現在すでに進んでいるプロジェクトもたくさんありまして、まず石油関係、石油の精製です。そして神戸製鋼の力を借りている鉄鋼業。他にもアルミニウム、教育、医療システム、金融システムなど、さまざまな面で協力が進んでいます。私たちはイスラム金融を発明しました。中東は、日本の金融機関にとっても非常に大きなマーケットになると思います。

私は5日前ぐらいにバーレーンの本国から戻ってきたところなんですけれども、バーレーンへの出張の前に神戸に行き、最先端の医療を進めている特区を訪問しました。バーレーンでは今、日本の神戸で行っているような医療特区をつくらうとしています。日本の製薬業界と協力を進めているのです。アメリカドルにして5億ドル近くの大きなプロジェクトが日本の製薬会社主導の下、バーレーンで進んでいます。

さらには山中教授の研究されていた iPS (Induced Pluripotent Stem cell) 細胞に関しても、私たちは中東でその研究の中心地になろうとしています。ゲームのソフトウェアのような開発も一緒に行っていたりしますので、本当にありとあらゆる意味で協力が進んでいます。ありがとうございました。

司会：ありがとうございます。このように日本の技術をバーレーンで研究し、アラブ用にカスタマイズしていくということが、アラブ諸国に日本の技術が広がっていくということにもつながると思いますし、医療関係だけではなくてあらゆる産業にそれはつながることではないかと思います。それではあらためまして、ハリール・ビン・イブラヒーム・ハッサン閣下に盛大な拍手をお願いいたします。

(会場 拍手)

(了)